

とかげや ばったの

怪獣のようなのが いたし

ともだちも

チューリップや ばらの花のような

かおを していた

幼稚園の 思い出には

なにか 特別な においがする

坂元先生は、幼稚園のにおいを感じとられ愛された、数少ない園長先生のお一人でいらしたと、今しみじみ思う。

(元・お茶の水女子大学附属幼稚園)

坂元彦太郎先生を偲んで

立川 多恵子

平成七年二月四日の夕方、坂元彦太郎先生が亡く

なられた。私たちとしてはとても残念なことであるが、先生にとっては久しぶりに奥様に会える嬉しい

旅への門出なのかもしれない。

奥様が亡くなられたのは丁度一年前である。私は奥様の御葬儀の日、先生のお寂しさを察して、葬儀

時間の少し前にお宅に伺って先生をお見舞いした。先生はその時「この二、三日は何が何だか分からなかったが、やっぱり辛い……」と言われ、しばらくの沈黙があつて、「これも運命ですね」と自分に言い聞かせるように呟かれていた。

私は葬儀のあいだ中、先生が病床にあつて、急に旅立たれた奥様との最期のお別れもできなかったことを思い、涙がこみ上げてきた。

先生と奥様の出会いは先生が東大（当時の東京帝国大学）を出て、最初の赴任地である姫路師範に勤務された時期である。通勤の途上、向こうから人力車に乗ってくる女学生がいた。その人こそやがて先生の奥様になられる方だったのである。当時奥様は足の病気で人力車を使って通学していたといわれる。結婚して五十余年、お二人の間に六人（男二人、女四人）のお子様が生まれた。先生が病床に伏されてから、時折お宅をお訪ねする機会があつたが、御夫婦にお会いする度に、お二人の間にほのぼ

のとした愛の美しさを感じることができた。

終戦時、大阪の師範学校で教鞭を取っていらした先生は、わが国に民主主義教育を確立するために、囑望されて文部省の青少年教育課長として赴任された。当時東京には転入制限があり、先生は二年単身赴任の後、大家族を連れて、やむをえず千葉に居を求めたということだったが、その頃当地では食糧の確保もままならなかったらしい。

そうした厳しい社会情勢の中で、日本の新しい教育制度を打ち立てるため、先生は大変な努力をされた。現在、日本の教育界にすっかり定着している六・三・三・四制という教育制度の誕生は坂元先生の力によるところが大きいと思われる。

連合国に無条件降伏をした戦後の日本は、すべてマッカーサーの指揮する総司令部の指示のもとに動かざるを得ない状態だった。したがって先生の仕事も総司令部で教育を担当していたヘファナン女史の指導下にあつたといえよう。

「戦後の教育改革の仕事は担当課長として、さぞ大変だったことでしょ……」と伺ったことがあるが、先生は即座に「そんなことはない。あの仕事をしたことで、アメリカ女性の知性と優しさを知ることができた」と話しておられた。先生が日本の新生に大きな貢献をされたことは私も関係者にとって極めて誇らしいことである。齢四十二歳、当時の先生を知っている人は、日本にこんな英国風紳士がいたかと目を見張るほど颯爽としていたという。

幼児教育界における先生の業績も大きく、「幼稚園が戦後、学校体系の中に入ったのは私の努力もあったのです……」といわれたことがある。昭和三十九年に改正された幼稚園教育要領（現行の幼稚園教育要領の前のもの）は、岡山大学から、お茶の水女子大学に移られた先生を委員長としてまとめられたものである。

その当時の教育界は戦後の体験主義に基づく学校教育に対しての批判の声も強く、昭和三十一年版で

は幼稚園教育要領に六領域を登場させ、幼稚園教育の構造化を図った。しかしそれが災いして、幼稚園界では長い間領域が教科的に扱われるようになり関係者を悩ませていた。したがって三十九年の改正は、こうした幼稚園の教科主義を払拭するための改定でもあり、その重責を先生が引受けられたといえよう。

たしかに三十九年版には、第二章内容の前文で、各領域は、小学校における教科とその性格が異なるものであることに留意しなければならないと明記されている。しかし先生は後日、やはり改定では三十九年版の六領域という言葉を工夫すべきだったと述懐されていた。

私が先生に初めてお会いしたのは、前任校の県立教員養成所の学生を連れてお茶の水女子大学附属幼稚園を見学した時のことである。当時先生は附属の幼稚園長を兼ねていらしたが、見学後学生たちを集めて幼稚園教育のことをいろいろ話して下さった

上、一つ一つの質問に丁寧に応じてくださったあの優しい目は今でも忘れられない。

その後私は、先生のお誘いを受けて幼児教育科のスタッフとして十文字短大に赴任した。そこで先生の管理者としての一面を見て、先生は管理者としての優秀さと、詩人としての優しさの両面を兼ね備えた稀なる存在であることを知った。ある時、私は無駄にも「先生の詩人の心はお嬢さんの影響が大きいです」と言いました。その言葉に先生は大きく

うなずいてくださった。

先生は私たちに子どもから学ぶことの大切さを伝えてくださったが、先生もまたご自分のお子様から、沢山の貴重な贈り物を受けられて、日本の教育界に大きな業績を残され、その九十一年の生涯を静かに閉じられたということが出来よう。ペンを置くに当たって先生のご冥福を心からお祈り申し上げたい。

（十文字学園女子短期大学）

思い出のひとこま

村田 修子